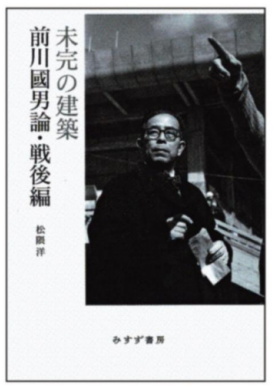
松隈洋さん新刊「未完の建築」

前川國男の言葉と歩く戦後

モダニズムの旗手

モダニズムの旗手と称された建築家の前川國男（1905～86年）は、日本の建築史を語る上で欠かせない一人だ。前川事務所の元スタッフで神奈川大教授の松隈洋さんが上梓した『未完の建築　前川國男論・戦後編』（みすず書房）は、前川や彼を巡る人々が残した言葉を記録する。膨大な言葉の数々は前川が考えた建築の役割を浮かび上がらせ、私たちに住みよい社会とは何かを問いかけてくる。（渡部圭介）



社会改革目指す

「前川さんって本当に真面目で、住宅問題の解決は建築家の使命なんだって思い続けていた」

松隈さんがそう語る本著の出発点は昭和20年8月15日。終戦とともに焼け野原が広がる国土には外地から引き揚げ者が押し寄せ、420万戸にも上る深刻な住宅不足に直面した。前川が取り組んだのがプレハブ住宅「プレモス」の開発だった。

終戦によって止まった木製グライダーの製造ラインで作ったパネルを組み立てるプレモスは、粗末なバラックではなく、「新しい美しさ」を追求した住まいでもあった。

《敗戦の日本には資材も金も足りないことは分かりきっている。それだからといって壕舎生活や同居生活や身動きならぬ六坪住宅でどうしてわれわれは一人前の生産ができようか？　どうして日本の再建ができようか？》

人々の心に思いをはせるだけでなく、復興とその先の社会をも見通した前川の言葉。松隈さんは、前川の師である近代建築の巨匠、ル・コルビュジエの影響を読み取る。

「コルビュジエの青年期は第一次世界大戦やロシア革命の時代。血で血を洗うような革命や戦争ではなく、建築で社会改革をしようとしました。前川さんも人間のための建築に組み直すことで、みんなが健康に暮らせるような住まい、都市ができるのではないかと考えたのだと思います」

プレモスは炭鉱開発に伴って需要が増した労働者の住まいに使われ、前川が本当に届けたかった人々には届かなかった。その背景について、松隈さんは資料や関係者の言葉をもとに、国の住宅政策の欠陥を明らかにした上で《敗北したのは前川ではなく、すべての人々が安心して住む場所を整えることを怠り、先送りを繰り返してきたこの国の住宅政策のほうだったのでは》という論考を加えている。

本著は前川の歩みを通じ、現代の日本でも繰り返されるさまざまな問題にまで踏み込む。

傑作への道のり

「失敗」に終わったプレモス。その思想は、コミュニティーのコアとなることを志向した東京の世田谷区庁舎などの傑作へとつながっていく過程が、前川の薫陶を受けた建築家で、図書館建築の名手として知られる鬼頭梓らの言葉によって明らかになる。

1958（昭和33）年のブリュッセル万博で高い評価を受けた日本館の経験が、京都会館（現ロームシアター京都、京都市左京区）へとつながる過程では戦前が影を落とす。前川が日本館、京都会館で現出させた「日本的なるもの」は、戦前のナショナリズムと結びついた様式への対抗であり、戦争を暗に許容した建築家たちへの怒りがあったのは、開戦前夜の日記からうかがい知れる。

《建築の意匠はただ美しく正しくあれ（中略）日本が強く健やかなるためには今一度本質の価値に立ち還る事である》

後進に問いかけ

残した言葉を一つもこぼすことなく収めたような一冊だが、松隈さんは前川から言葉の大切さを教えられた。

大学卒業後の昭和55年に前川の事務所に入社。亡くなるまでの6年、印象に残っている教えに「言葉を選んで文章を構築する力がない、文章をちゃんと書けないやつは建築の設計はできない」がある。

前川は自分の作品を誇ることもしなかったという。

「『建築家は今、こういうことを考えなきゃいけない』といった具合で、常にアジテーションをしている感じでしたね。ずっと『お前たちはどうするんだ』と、問いかけられているように思うんですよ」

温かく、厳しく、激しい。生々しさにあふれた言葉に触れ、前川と対話しながら戦後の日本を歩いているような一冊である。

建築史家で神奈川大教授の松隈洋さん
＝大阪市浪速区（須谷友郁撮影）

まつくま・ひろし　昭和32年、兵庫県生まれ。京都大卒。京都工芸繊維大の教授などを経て、令和5年から神奈川大教授。研究のかたわら、前川國男作品をはじめ近代建築の保存活動にも取り組む。

Copyright © The Sankei Shimbun. All rights reserved.掲載記事、写真の無断転載を禁じます。